

臨終を看取りに来ていた医者が帰ると、妹弟たちは茶碗の水に浸された柘榴の葉を順番に父親の口元に運び唇を潤した。過去から永劫に続いている時の流れが、一つの命の終わりを告げ、それを惜しむ者たちの気持ちが一つになって、祖父の周りに集まっていた。

篤彦の番になったとき、もう祖父はこの世にいないのだという思いが胸を締めつけた。好恵は縁側に出て涙を拭っていた。

東の空が白み、祖父が眺め通した縁側越しの松の影がはっきりと姿を現わした。そのとき、一番蟬が昨日と同じように鳴きはじめた。

祖父は大きなたらいの中で洗われ、昨日までの寝巻きは白装束に着がえさせられた。北向きに方向を変えられた布団の枕元に、ご飯に箸を立てた茶碗がおかれ、三つ巴の紋の入った着物が逆さまにかけられる。篤彦はその模様に見覚えがある。昔、春のももて祭りに連れて行ってくれた栄三郎が着ていたものだ。

白い着物の袖から胸の上に出た祖父の手に、恐る恐る触ってみた篤彦は、その異様な冷たさに驚いた。ガラスのものでも水のものでもない、自分から遠く離れたところにあって、一度も経験したことのない冷たさであった。篤彦は指の先から祖父の体全体を感じていた。

「早うせんならん、お父はん、もう固うなったりよるが」叔父の言葉に、入棺の予定が早められた。長身の祖父の身体は、膝を組ませて棺の中に納めるのに時間がなかった。篤彦は祖父が痛がっている気がしてならなかった。

台風の影響で、曇り日が続いている。

葬式の日、昼前まで雲っていた空は、午後には小雨に変わった。式は、講中と

よ 呼ばれる近所きんじよの人たちによって進められていた。鈍く響く鐘かねが三時の野辺のべの送りおくを告げると、葬列そうれつが通るあぜ道みちや土手の堤つつみには、線香せんこうがくゆっている竹たけが立てられていった。

祖父そふが半世紀はんせいぎの間、耕たがやし続けた田畑たはたの見たせる財田川さいたがわの土手どてが野辺のべの道みちだった。お坊さんほうさんの赤い大きな笠かさと、頭あたまに三角さんかくの白い紙しろをつけた息子むすこたちを筆頭ひつどうに、写真しゃしんやわらじを持った親族しんぞくの列れつが小雨こさめの土手どてを進んだ。

墓地ぼちでは講中こうじゅうの人たちが、夏草なつきを刈りとり、雨あめの染み込んだ黒土くろつちを黙々と掘っていった。穴あなの周りに盛り上げられていく土つちに、辺りにはびこっている紫色むすびいろの花をつけたタデが埋もれていく。水みずを含んだ泥どろは、いつの間にか、篤彦あつひこの布ぬののズック靴ぐつを黒く染めている。

線香せんこうと泥どろの匂においが立ちこめる中に般若心経はんにやしんぎょうが流れ、埋葬まいそうが始まった。白木の棺桶かんおけは降ろされていくとき、穴あなの周囲しゅういの土つちにあたってはギリギリりと奇妙きみょうな音をたてる。棺ひつぎが暗い穴くわいの底そこに固定こていされると、喪主もしゆの兄あにから鋏くわを手渡てわたされた弟妹ていまいたちが次々に土つちをかけた。

読経よみきやうに混じって、穴あなの底そこに向かって嘔せうきかける声こゑと嗚咽おえつが、途切れとぎれに聞こえてくる。幼い従兄弟おきなが小さな手で土つちをかけたとき、その中なかにあった小石こいしが棺ひつぎの上ではじけた。彼はそれを面白おもしろがって別の石いしを落とそうとした。篤彦あつひこはその手を引つ張ろうとした拍子ひょうしに倒れ、盛りあげられていた土つちの山やまに膝ひざをついた。そのとき、人の頭あたまくらいの石いしが転げ落ち、棺ひつぎがガシリと鈍く異様な音おとを立てた。篤彦あつひこは思わず息を潜めた。棺ひつぎの中の祖父そふが眼めを覚ます、そう思うほど音おとは大きかった。

「アツよ、痛いがい」窮屈きゆうくつそうに膝ひざと手を組まされていた棺ひつぎの中の祖父そふが、そう言

った気がした。暗い穴の底をのぞき込むと、見えるのはもう白い蓋の一部分だけだ。その白さだけが、唯一、祖父とのつながりに思え、最後のひとすくいの黒土が、その一点をおおってしまう瞬間をおそれた。

篤彦は埋葬から帰ってひと休みすると、夕方、一人で土手に行ってみた。雨は止んでいるが、今日の及川には水しぶきは見られない。

あの雷雨の日の午後とよく似た暗い空だ。川原を眺めていると、浅瀬で流してしまったゴム草履が思いだされた。祖父のくれた草履は、今このとき、どこにあるのだろうか。どうしてあのととき、取り戻そうとしなかったのか、胸苦しさが篤彦を追いつめた。

竹やぶの大きなざわめきが、台風の接近を告げている。ニュースによれば、今度の台風十号は大型の兩台風で、香川を直撃するという。

財田川は、一度、台風の大洪水で決壊したことがある。元気だった祖父が水防具に身を固めた姿と、鳴り響いていた半鐘の音が、記憶の中の言葉と混ざりあう。

「大水が田圃に流れ込まんように、そこら中の者が総出で土嚢積みと水路づくりにはたらきたら、じゃが、土手は切れてしもうた。その台風は北海道で船まで沈め、二千人もの命を奪うた……」

祖父が話してくれたのは、三年前の台風十五号、洞爺丸台風と呼ばれている大型台風のことだった。それは日本列島を北に進攻する前に四国を直撃した。財田川の土手を突き破った濁流は、お荒神さんの石垣の下まで押しよせ、一面が広大な池になっっていた。

篤彦が小学校二年のときのことだ。その後、土手は改修され、及川のあたりは生

まれかわった。夏ごとに、篤彦たちが楽しんでる、今の泳ぎ場がそれだ。

今度の台風は大丈夫なのだろうか。篤彦はタケシや守たちと、この川で好きなだけ泳ぎたかった。来年も、その次も……。

家に戻ると、広くなった座敷で主のいない扇風機が首を振りながら回っている。祖父のために、もう扇風機をつけることはないのだ。

篤彦は布団が敷かれていた座敷の奥に行くと、黒ずんだ畳に仰向けになった。

天井を見上げていると、くすんだ梁が交差しているあたりに、まだ祖父の視線が留まっているような気がしてきてならない。

縁側の光の方に首をまわすと小雨に濡れた松が目にはいる。若いとき、知行寺山から苗を担いで帰り、庭の隅に移植した気に入りの一本だ。祖父は来る日も来る日も、ひがなその松を眺めていたのだ。祖父が身を置いていた場に横たわっていると、身動きの取れない体で過ごした栄三郎の数百時間が細かい時の片りんとなって、篤彦を押し包んだ。

夏台風 — 別れ —

台風は栄三郎の葬式のすむのを待っていたように勢いを増し、四国山脈を横断しながら香川から瀬戸内海へのコースに突入していた。

夕方から吹き出した風は、夜には雨混じりとなって急激に強さを増している。

篤彦と好恵は早い夕食を済ませると、大雨の時には雨漏りのする部屋から母屋に移った。線香の匂いが、まだかすかに漂ってくる。

夜中近く、風が激しくなり雨戸がしなり始めると、叔父は障子戸を内側から抑えながら叫んだ。「皆で並んで突っ張りになるんじや」

障子の紙がビリビリ鳴っている。篤彦も好恵と叔母と一緒に両腕を真っ直ぐ前に伸ばし、体を斜めにして体ごと戸の支え棒になった。

電柱の電線や庭木の枝葉が、聞いたことのないような大きな音を立て、雨樋からバシャバシャと溢れ落ちる水音がそれに混じった。

篤彦はふと祖父を埋葬したばかりの墓地を思いだし、土中の棺に水が洩れているのではないかという思いにとらわれた。

暗闇の夜気の中で風の吹きすさぶ音を聞いていると、篤彦の中に台風前のごことが次々に去来した。葉子や夕希ちゃんは、今この時、どうしているんだろう。

(以上10月24日放送分)